

研修テーマ「道徳科における対話を通じた深い学び

—児童が対話し深い学びにつなげるための授業づくり—

I 研修の内容

道徳が教科となり、小学校では2018年度、中学校では2019年度から完全実施されている。教科となる前の「道徳の時間」にはⅡ1で述べるような課題が指摘されてきたが、その中には自身の抱えてきた課題と重なる点があった。「考え、議論する道徳」への転換が求められている今、児童にとって豊かな学びにするには、どのような道徳科の授業づくりをしていったらよいのかということに視点を当てて研究を行った。

Ⅱ 研修の成果と課題

1. 道徳のこれまでの課題と今日の道徳科の役割

従来「道徳の時間」では、「読み物教材の登場人物の心情理解に終始する授業」「望ましいと思われることやわかりきったことを言わせたり書かせたりする指導」などが課題とされてきた。これからの予測困難な未来を生き抜くには、多様な価値観を認め合い、自ら考え他者と対話し協働しながら、よりよい方向を目指す資質・能力を備えることが重要となる。こうした資質・能力の育成に向け、道徳教育は大きな役割を果たす必要がある。道徳科は学校の教育活動全体における道徳教育の要としての役割を担い、道徳的諸価値の学びをより効果的なものとするのが期待されている。

2. 道徳科における対話を通じた深い学び

深い学びに必要なことは多様な考え方、感じ方に出合うことであり、対話的な学びが重要となる。道徳科の授業において、教材、他者、自分と対話する時間をいかに作り出し、深い学びにつなげていくのかを考えていくことが重要であろう。この考えをもとにして①教材との出合わせ方を工夫し、いかに自分事として捉えさせるか、②他者との対話をどのように仕組むか、③自己内対話の保障や自分の考えを表現する工夫という3つの視点から授業を構想し、所属校の第2学年の学級において実践研究を行った。実践を通して、児童の反応や活動の様子から多くを学ぶことができたが、3つの視点に共通して重要なのは「問い」であった。児童が考えたいものになっているのか、授業のねらいに向き合っているものになっているのか、といった様々な視点で考える必要がある。

このような「問い」に基づき、対話を通じた深い学びをすすめていく上で不可欠となるのは、学びの基盤となる学級づくりである。多様な考えや価値観が認められ、尊重し合う温かい関係が児童同士、そして教師と児童の間にあることが大切であろう。さらに教師の役割も重要である。児童の発言やつぶやきを受け止める、問い返す、全体に広げる、待つことによって対話を促していく。「問い」を構想していく時に、教えるではなく、教師も児童とともに考え、道徳的な価値を追求していく姿勢が求められる。

今後の課題として、児童が進んで思いや考えを表現することができる指導方法や支援の在り方を研究し続けていきたい。特に、児童自身が道徳的成長を実感し学習意欲の向上につなげていけるような評価方法の研究を進めていきたい。（日下部小学校 柳澤晴子）